

「脱プラ製ストロー」で波紋

「生分解」引き合い急増の備中化工

国産トップシバセ工業は「分別回収する日本でなぜ」

プラスチックによる海洋汚染が問題視され、世界的に始まった脱プラスチック製ストロー運動が外資系外食企業を中心に国内でも広がり始めている。岡山県下ではANAクラウンプラザホテル岡山が7月にいち早く紙製ストローに転換し、環境意識の高さを示した。一方、県下のストロー製造業者はプラスチックごみ全体から見れば微々たるストローがやり玉に挙げられている状況に疑問を呈している。国産ストロー発祥の地とされる岡山県に広がる波紋を追った。

県下でいち早く紙ストローへの転換を決めたのは、ANAクラウンプラザホテル岡山だった。EUでのプラスチックごみ削減の動きを受け、インターコンチネンタルホテルズグループ（IHG）が不使用の方針を打ち出し、国内のIHGANAグループも追随した。強制ではないが、柴田公房総支配人は「水を大量に使うなど環境負荷の大きいホテルとして、世界的な環境運動は重視しなければならない」として紙製への転換を決断。同グループの中でも、早い取り組みとなった。

同ホテルの消費量は、レストランなどで年間数万本。紙製に変えることでコストは4～5倍に上がり、長時間液体に漬けているとふやける難点もあるが、客の反応は良好。欧米人客も多いことから評価は高まりそうだ。

生分解プラ製にも光

欧米同様主流は紙製への切り替え。現在輸入が大半。国内製紙メーカーなどは開発、増産体制の構築に取り組み始めているが、存在感を発揮するのは当面先となりそう。一方、土中やコンポストで分解する生分解性プラスチックの注目度も高まっている。2005年の愛・地球博（愛知万博）に250万本の生分解性プラスチックを供給し

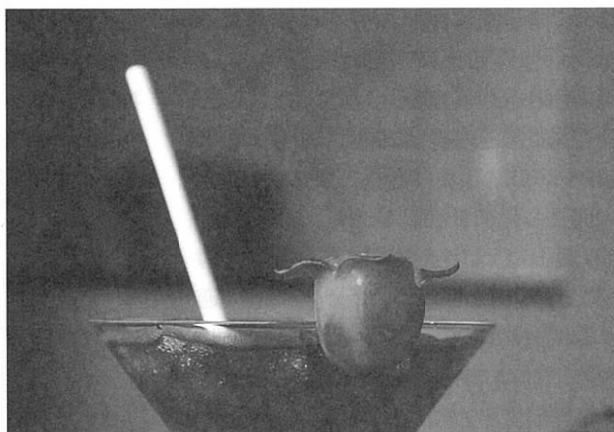
たストローメーカーの中備化工（備中）（浅口市）では、万博以後ほぼ動きのなかった同商品に対して、7月のスターバックスの脱プラ発表以後、東京都内を中心にホテルやカフェから問い合わせやサンプル依頼が急増。受注は5～10倍に跳ね上がった。

同社によると、価格を石油系プラスチック製の2～3倍に抑え紙製ストローより安価な点が支持されているほか、紙製ストローのふやけや、接着剤への不安の声が上がっていることも選ばれる要因になっているという。同社では石油系プラスチック製に並ぶ柱に育てたい考えで、化学メーカーが開発を進めている水中でも分解されやすい素材などへの対応も積極的に行う方針だ。

日本での効果に疑問の声も

一方、国産ストロートップメーカーのシバセ工業（備中）（同市）の磯田拓也社長は、「影響はない」と言い切る。外資系などの大手飲食業者が使用してきたのは市場の9割を占める輸入品で、同社は多品種小ロットを強みに小規模な飲食店向けに事業を展開しており、そういった中小事業までが同運動に参加する見込みは低いと考えているからだ。

しかしながら今回の潮流に対しては、「分別回収が徹底され、ほぼ焼却されている日本にはそぐわない」と苦言を呈している。分別回収してもどうしても発生する“漏れ”が問題視されているが、問題はその漏れの原因となるポイ捨てや分別していないごみにあり、まして海洋汚染を語るなら、本当の問題は“垂れ流し”している途上国や先進国でありながら洪水などで流出の可能



ANAクラウンプラザホテル岡山が紙ストローに転換性がある埋め立てという手法をとっている欧米諸国にあると指摘。「むしろ分別回収などの技術協力で貢献すべき」と強調する。また、プラスチックごみに占めるストローの割合は微々たるもので、薄く、軽く、安く低価格を追求して進化してきたため使用されるプラスチックもごくわずかなため、話題となったウミガメの鼻にストローが刺さっているセンセーショナルな写真をもってやり玉に挙げられている現状に困惑した表情を見せている。

問われる抑制と回収の調和

国は来年開かれるG20大阪サミットまでにプラスチック資源循環戦略の策定を目指している。ここで注目したいのは使用の削減、回収・再利用、バイオプラスチックへの代替促進を柱としている点。（公財）県環境保全事業団・環境学習センター「アスエコ」は、脱プラ製ストローの動きに「企業が環境保護への姿勢を示し、広く環境意識が広まることには大きな意義がある」としながら「分解されるから捨ててもいいとなつてはいけぬ」と指摘する。中国のプラスチックごみ輸入禁止で、国内の保管料が許容量を超えつつある。日本の環境対策の根幹の回収・処理体制を見直し、海洋へ流出しないようにすることが先決だ。